

1 ●[文99] 三角形の面積2等分の三角形の周の長さの最小と2辺[2002 数学I ⅡAB(文理)99]
 辺の長さがそれぞれ $AB=10$, $BC=6$, $AC=8$ の $\triangle ABC$ がある. 辺 AB 上に点 P , 辺 AC 上に点 Q を, $\triangle APQ$ の面積が $\triangle ABC$ の面積の $\frac{1}{2}$ になるようにとる.

- (1) 2辺の長さの和 $AP+AQ$ を u とおく. $\triangle APQ$ の周の長さ l を u を用いて表せ.
 (2) l が最小となるときの AP , AQ , l の値を求めよ.

解説

(1) $AB:BC:CA=5:3:4$ から $\angle C=90^\circ$

ゆえに $\cos A = \frac{4}{5}$, $\sin A = \frac{3}{5}$

$AP=x$, $AQ=y$ とおく.

$\triangle APQ = \frac{1}{2} \triangle ABC$ から $\frac{1}{2}xy\sin A = \frac{1}{2} \times 6 \times 8 \times \frac{1}{2}$

ゆえに $xy \times \frac{3}{5} = 24$ よって $xy=40$

$\triangle APQ$ に余弦定理を適用すると

$$PQ^2 = x^2 + y^2 - 2xy\cos A = (x+y)^2 - 2xy\left(1 + \frac{4}{5}\right) = u^2 - 144$$

ゆえに $PQ = \sqrt{u^2 - 144}$

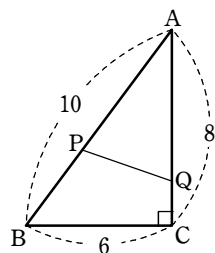
よって $l = u + \sqrt{u^2 - 144}$ …… ①

(2) $u = x + y \geq 2\sqrt{xy} = 2\sqrt{40} = 4\sqrt{10}$

等号成立は $x=y$ かつ $xy=40$ すなわち $x=y=2\sqrt{10}$ のとき.

よって ① から, l は $AP=AQ=2\sqrt{10}$ のとき

最小値 $4\sqrt{10} + \sqrt{160-144} = 4(\sqrt{10} + 1)$ をとる.



2 ●[文115, 理118] 5乗根 $(1+1/n)-1$, $1-5$ 乗根 $(1-1/n)$, $1/(5n)$ の大小[2002 数学I ⅡAB(理)118]

n を自然数とするとき, 3つの数 $a = \sqrt[5]{1 + \frac{1}{n}} - 1$, $b = 1 - \sqrt[5]{1 - \frac{1}{n}}$, $c = \frac{1}{5n}$ の大小を比較せよ.

解説

$\frac{1}{5n} = x$ とおくと, n は自然数であるから $0 < x \leq \frac{1}{5}$ …… ①

$a = \sqrt[5]{1+5x} - 1$, $b = 1 - \sqrt[5]{1-5x}$, $c = x$

$b - c = 1 - x - \sqrt[5]{1-5x}$

$(1-x)^5 - (1-5x) = 10x^2 - 10x^3 + 5x^4 - x^5 = 10x^2(1-x) + x^4(5-x)$

① から $10x^2(1-x) + x^4(5-x) > 0$

ゆえに $(1-x)^5 > 1-5x$ よって $b > c$

$c - a = x - \sqrt[5]{1+5x} + 1 = 1 + x - \sqrt[5]{1+5x}$

$(1+x)^5 - (1+5x) = 10x^2 + 10x^3 + 5x^4 + x^5$

① から $10x^2 + 10x^3 + 5x^4 + x^5 > 0$

ゆえに $(1+x)^5 > 1+5x$ よって $c > a$

以上から $b > c > a$

3 ●[理124] $x^a = y^b = z^c = xyz$ の正整数 a, b, c [2002 数学I ⅡAB(理)124]

関係式 $x^a = y^b = z^c = xyz$ を満たす 1 とは異なる 3つの正の実数の組 (x, y, z) が, 少なくとも 1組存在するような, 正の整数の組 (a, b, c) をすべて求めよ. ただし, $a \leq b \leq c$ とする.

解説

$x^a = y^b = z^c = xyz = 10^k$ とおくと, $x > 0$, $y > 0$, $z > 0$ から

$a \log_{10} x = b \log_{10} y = c \log_{10} z = \log_{10} x + \log_{10} y + \log_{10} z = k$

$a > 0$, $b > 0$, $c > 0$ であるから $\log_{10} x = \frac{k}{a}$, $\log_{10} y = \frac{k}{b}$, $\log_{10} z = \frac{k}{c}$

ゆえに $\frac{k}{a} + \frac{k}{b} + \frac{k}{c} = k$

$x \neq 1$ であるから $k \neq 0$ よって $\frac{1}{a} + \frac{1}{b} + \frac{1}{c} = 1$ を満たすことが必要.

ここで, $1 \leq a \leq b \leq c$ であるから $1 \geq \frac{1}{a} \geq \frac{1}{b} \geq \frac{1}{c} > 0$

ゆえに $1 = \frac{1}{a} + \frac{1}{b} + \frac{1}{c} \leq \frac{1}{a} + \frac{1}{a} + \frac{1}{a} = \frac{3}{a}$

よって $a \leq 3$

a は正の整数であるから $a = 1, 2, 3$

[1] $a=1$ のとき $\frac{1}{b} + \frac{1}{c} = 0$ となり不適.

[2] $a=2$ のとき $\frac{1}{b} + \frac{1}{c} = \frac{1}{2}$ から $bc = 2b + 2c$

ゆえに $(b-2)(c-2) = 4$ …… ①

$2 \leq b \leq c$ であるから $0 \leq b-2 \leq c-2$

また, $b-2$, $c-2$ は整数であるから,

① より $(b-2, c-2) = (1, 4), (2, 2)$

ゆえに $(b, c) = (3, 6), (4, 4)$

[3] $a=3$ のとき $\frac{1}{b} + \frac{1}{c} = \frac{2}{3}$ から $2bc = 3b + 3c$

よって $4bc = 6b + 6c$

ゆえに $(2b-3)(2c-3) = 9$ …… ②

$3 \leq b \leq c$ であるから $3 \leq 2b-3 \leq 2c-3$

また, $2b-3$, $2c-3$ は整数であるから, ② より $(2b-3, 2c-3) = (3, 3)$

ゆえに $(b, c) = (3, 3)$

以上から $(a, b, c) = (2, 3, 6), (2, 4, 4), (3, 3, 3)$

逆に, これらの (a, b, c) に対し, 関係式を満たす 1 とは異なる正の実数の組

$(x, y, z) = (10^{\frac{1}{a}}, 10^{\frac{1}{b}}, 10^{\frac{1}{c}})$ が存在する.

4 ●[文149]xy平面上の円の中心座標の数列. x座標の一般項[2002 数学I IIA B (文理)149]

次のように円 C_n を定める. まず, C_0 は $(0, \frac{1}{2})$ を中心とする半径 $\frac{1}{2}$ の円, C_1 は $(1, \frac{1}{2})$ を中心とする半径 $\frac{1}{2}$ の円とする. 次に C_0, C_1 に外接し x 軸に接する円を C_2 とする. 更に, $n=3, 4, 5, \dots$ に対し, 順に, C_0, C_{n-1} に外接し x 軸に接する円で C_{n-2} でないものを C_n とする. $C_n (n \geq 1)$ の中心の座標を (a_n, b_n) とするとき, 次の問いに答えよ. ただし, 2つの円が外接するとは, 中心間の距離がそれぞれの円の半径の和に等しいことをいう.

(1) $n \geq 1$ に対し, $b_n = \frac{a_n^2}{2}$ を示せ.

(2) a_n を求めよ.

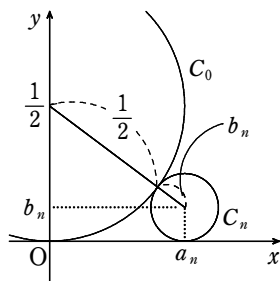
解説

(1) C_n は, 中心が (a_n, b_n) であるから, 半径は b_n である.

よって, 右図から

$$a_n^2 + \left(\frac{1}{2} - b_n\right)^2 = \left(\frac{1}{2} + b_n\right)^2$$

$$\text{ゆえに } b_n = \frac{a_n^2}{2}$$



(2) 右図から $(b_n + b_{n-1})^2 = (b_{n-1} - b_n)^2 + (a_{n-1} - a_n)^2$

$$\text{ゆえに } (a_{n-1} - a_n)^2 = 4b_n b_{n-1}$$

$$\text{よって, (1) から } (a_{n-1} - a_n)^2 = a_n^2 a_{n-1}^2$$

$0 < a_n < a_{n-1}$ であるから $a_{n-1} - a_n = a_n a_{n-1}$

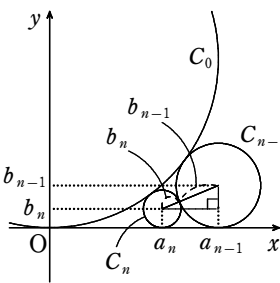
$$\text{ゆえに } \frac{1}{a_n} - \frac{1}{a_{n-1}} = 1$$

$a_1 = 1$ であるから, $n \geq 2$ のとき

$$\frac{1}{a_n} = \frac{1}{1} + \sum_{k=1}^{n-1} \left(\frac{1}{a_{k+1}} - \frac{1}{a_k}\right) = n$$

ゆえに $a_n = \frac{1}{n}$ これは $n=1$ のときも成り立つ.

したがって $a_n = \frac{1}{n}$



5 ●[文207] $y=x^2$ 上の2点の内積tのとりうる範囲, t一定の和の軌跡[2002 数学I IIA B (文理)207]

O を原点とする座標平面上の曲線 $y=x^2$ 上の2点 A, B に対し, $\vec{OA} \cdot \vec{OB} = t$ とおく.

(1) t のとりうる値の範囲を求めよ.

(2) $t=2$ のとき, $\vec{OP} = \vec{OA} + \vec{OB}$ となる点 P の軌跡を求め, 図示せよ.

解説

(1) A (a, a^2) , B (b, b^2) とすると, $\vec{OA} \cdot \vec{OB} = t$ から $t = ab + a^2 b^2 = \left(ab + \frac{1}{2}\right)^2 - \frac{1}{4}$

ab は任意の実数値をとるから $t \geq -\frac{1}{4}$

(2) $t=2$ であるから $a^2 b^2 + ab - 2 = 0$

ゆえに $ab = 1, -2$

$\vec{OP} = (x, y)$ とおくと, $\vec{OP} = \vec{OA} + \vec{OB}$ から

$$x = a + b, y = a^2 + b^2$$

[1] $ab = 1$ のとき

$$x = a + \frac{1}{a}, y = a^2 + \frac{1}{a^2}$$

よって $y = x^2 - 2$

$$\text{ここで, } x = a + \frac{1}{a} \text{ から } a^2 - xa + 1 = 0$$

a は実数であるから $x^2 - 4 \geq 0$

ゆえに $x \leq -2, 2 \leq x$

[2] $ab = -2$ のとき

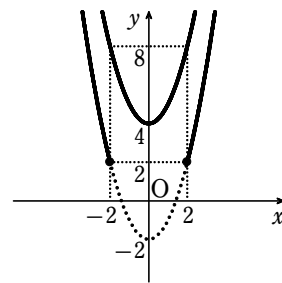
$$x = a - \frac{2}{a}, y = a^2 + \frac{4}{a^2}$$

よって $y = x^2 + 4$

$$\text{ここで, } x = a - \frac{2}{a} \text{ から } a^2 - xa - 2 = 0$$

$D = x^2 + 8 > 0$ となるから, x は任意の実数値をとりうる.

以上から, 点 P の軌跡は右図のようになる.



6 ●[3C11]楕円内の領域が円内の領域を含む条件[2002 数学III C11]

a, b を正数とし, xy 平面で不等式

$$\frac{\{x - (1-a)\}^2}{a^2} + \frac{y^2}{b^2} \leq 1$$

の表す領域 D と, 不等式 $x^2 + y^2 \leq 1$ の表す領域 E を考える.

(1) $a=2, b=1$ の場合に, 領域 D を図示せよ.

(2) D が E に含まれるための a, b の条件を求め, ab 平面上でその条件の表す領域を図示せよ.

解説

$$(1) \frac{(x+1)^2}{4} + y^2 \leq 1$$

よって, 領域は図の斜線部分.

ただし, 境界線上の点を含む.

(2) 求める条件は

$$\frac{\{x - (1-a)\}^2}{a^2} + \frac{y^2}{b^2} \leq 1 \dots \textcircled{1}$$

を満たす任意の点 (x, y) に対して

$$x^2 + y^2 - 1 \leq 0 \dots \textcircled{2}$$

が成り立つことである.

$$\textcircled{1} \text{ から } y^2 = b^2 \left\{ 1 - \frac{(x-1+a)^2}{a^2} \right\},$$

$$-a \leq x - 1 + a \leq a$$

$$\frac{x-1+a}{a} = t \text{ とおくと } x = at - a + 1, -1 \leq t \leq 1$$

このとき, $y^2 = b^2(1-t^2)$ であるから, $\textcircled{2}$ の左辺を $f(t)$ とおくと

$$\begin{aligned} f(t) &= (at - a + 1)^2 + b^2(1-t^2) - 1 \\ &= a^2(t-1)^2 + 2a(t-1) + b^2(1-t^2) \\ &= (t-1)\{(a^2 - b^2)t - (a^2 - 2a + b^2)\} \end{aligned}$$

$-1 \leq t \leq 1$ で $t-1 \leq 0$ であるから, $-1 \leq t \leq 1$ において

$(a^2 - b^2)t - (a^2 - 2a + b^2) \geq 0$ が成り立てばよい.

ゆえに $(a^2 - b^2) - (a^2 - 2a + b^2) \geq 0$

$$\text{かつ } -(a^2 - b^2) - (a^2 - 2a + b^2) \geq 0$$

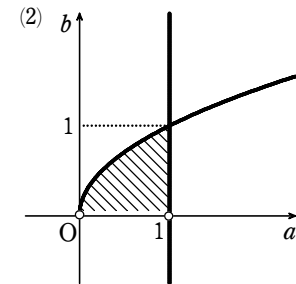
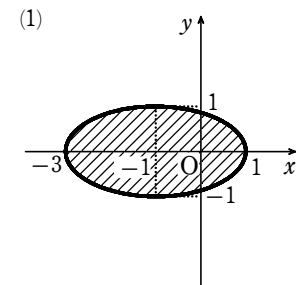
よって $b^2 \leq a$ かつ $0 \leq a \leq 1$

$a > 0, b > 0$ であるから

$$0 < a \leq 1, b > 0, b^2 \leq a$$

よって, グラフは図の斜線部分.

ただし, 境界線上の点のうち a 軸上の点を除く.



7 ○ [3C114] 2式の大小, 2数の大小 [2002 数学Ⅲ C114]

(1) x を正の数とするとき, $\log\left(1+\frac{1}{x}\right)$ と $\frac{1}{x+1}$ の大小を比較せよ.

(2) $\left(1+\frac{2001}{2002}\right)^{\frac{2002}{2001}}$ と $\left(1+\frac{2002}{2001}\right)^{\frac{2001}{2002}}$ の大小を比較せよ.

解説

(1) $x > 0$ のとき, $f(x) = \log\left(1+\frac{1}{x}\right) - \frac{1}{x+1}$ とおくと

$$f(x) = \log(x+1) - \log x - \frac{1}{x+1}$$

$$f'(x) = \frac{1}{x+1} - \frac{1}{x} + \frac{1}{(x+1)^2} = \frac{x(x+1) - (x+1)^2 + x}{x(x+1)^2} = -\frac{1}{x(x+1)^2} < 0$$

ゆえに, $y = f(x)$ は単調に減少する.

また, $\lim_{x \rightarrow \infty} f(x) = 0$ であるから, $x > 0$ のとき $f(x) > 0$

$$\text{よって } \log\left(1+\frac{1}{x}\right) > \frac{1}{x+1}$$

(2) $x > 0$ のとき, $y = \left(1+\frac{1}{x}\right)^x$ とおくと $\log y = x \log\left(1+\frac{1}{x}\right)$

両辺を x で微分すると

$$\frac{1}{y} \cdot \frac{dy}{dx} = \log\left(1+\frac{1}{x}\right) + x\left(\frac{1}{x+1} - \frac{1}{x}\right) = \log\left(1+\frac{1}{x}\right) - \frac{1}{x+1}$$

ここで, (1) の結果および $y > 0$ であることから, $\frac{dy}{dx} > 0$ となる.

ゆえに, $x > 0$ のとき, $y = \left(1+\frac{1}{x}\right)^x$ は単調に増加する.

$$\text{よって } \left(1+\frac{2002}{2001}\right)^{\frac{2001}{2002}} < \left(1+\frac{2001}{2002}\right)^{\frac{2002}{2001}}$$

8 ● $0 < a < 1$ を満たす a について, $x(x^{-a}-1) < a$ の証明 [2002]

a が $0 < a < 1$ を満たす定数のとき, 任意の正の実数 x に対し, $x(x^{-a}-1) < a$ が成り立つことを証明せよ.

解説

$f(x) = a - x(x^{-a}-1)$ とおく. すなわち $f(x) = a - x^{1-a} + x$

$$f'(x) = -(1-a)x^{-a} + 1$$

$$f'(x) = 0 \text{ とすると } -(1-a)x^{-a} + 1 = 0$$

$$\text{これを解くと } x = (1-a)^{\frac{1}{a}}$$

ゆえに, $x > 0$ において, $f(x)$ の増減表は次のようになる.

x	0	...	$(1-a)^{\frac{1}{a}}$...
$f'(x)$	/	-	0	+
$f(x)$	/	↘	極小	↗

よって, $x > 0$ において, $f(x)$ は $x = (1-a)^{\frac{1}{a}}$ で極小かつ最小となる.

$$f\left((1-a)^{\frac{1}{a}}\right) = a - (1-a)^{\frac{1}{a}}\left(\frac{1}{1-a} - 1\right) = a\left\{1 - (1-a)^{\frac{1}{a}-1}\right\} = a\left\{1 - (1-a)^{\frac{1-a}{a}}\right\}$$

$$0 < a < 1 \text{ であるから } 0 < 1-a < 1, \frac{1-a}{a} > 0$$

$$\text{よって } (1-a)^{\frac{1-a}{a}} < (1-a)^0 = 1$$

ゆえに, $1 - (1-a)^{\frac{1-a}{a}} > 0$ であるから, $f\left((1-a)^{\frac{1}{a}}\right) > 0$ が成り立つ.

すなわち, $f(x) > 0$ が成り立つ.

したがって, $x(x^{-a}-1) < a$ が成り立つ.

[9] ● [3C165] 定積分の漸化式で表された数列. 単調減少の証明. 背理法 [2002 数学Ⅲ C165]
 $f(x)$ を実数全体で定義された連続関数で, $x > 0$ で $0 < f(x) < 1$ を満たすものとする.
 $a_1 = 1$ とし, 順に,

$$a_m = \int_0^{a_{m-1}} f(x) dx \quad (m = 2, 3, 4, \dots)$$

により数列 $\{a_m\}$ を定める.

- (1) $m \geq 2$ に対し, $a_m > 0$ であり, かつ $a_1 > a_2 > \dots > a_{m-1} > a_m > \dots$ となることを示せ.
- (2) $\frac{1}{2002} > a_m$ となる m が存在することを背理法を用いて示せ.

解説

(1) (ア) $a_m > 0$ であることの証明

$$[1] \quad a_2 = \int_0^{a_1} f(x) dx = \int_0^1 f(x) dx > \int_0^1 0 dx = 0$$

よって $a_2 > 0$

[2] $m = k$ のとき $a_k > 0$ と仮定する.

このとき, $x > 0$ で $f(x) > 0$

$$\text{また } a_k > 0 \text{ であるから } a_{k+1} = \int_0^{a_k} f(x) dx > 0$$

すなわち, $m = k$ のとき成り立つと仮定すると, $m = k + 1$ のときも成り立つ.

したがって, [1], [2] から, $m \geq 2$ のとき $a_m > 0$ である.

(イ) $a_1 > a_2 > \dots > a_{m-1} > a_m > \dots$ であることの証明

$a_1 = 1$ と (ア) から, すべての $m \geq 2$ に対して $a_{m-1} > 0$

また $0 < f(x) < 1$

$$\text{よって, } m \geq 2 \text{ のとき } a_m = \int_0^{a_{m-1}} f(x) dx < \int_0^{a_{m-1}} dx = a_{m-1}$$

ゆえに $a_1 > a_2 > \dots > a_{m-1} > a_m > \dots$

(2) $\frac{1}{2002} > a_m$ となる m が存在しないと仮定すると, すべての m について

$$a_m \geq \frac{1}{2002}$$

ここで, $p = \frac{1}{2003}$ とすると $a_m > p$

特に $a_1 > p$

区間 $[p, a_1]$ における $f(x)$ の最大値を M とすると $0 < M < 1$

$$a_m = \int_0^{a_{m-1}} f(x) dx = \int_0^p f(x) dx + \int_p^{a_{m-1}} f(x) dx$$

$$< \int_0^p dx + \int_p^{a_{m-1}} M dx = p + M(a_{m-1} - p)$$

ゆえに $0 < a_m - p < M(a_{m-1} - p)$

よって $0 < a_m - p \leq M^{m-1}(a_1 - p)$

$$\lim_{m \rightarrow \infty} M^{m-1}(a_1 - p) = 0 \text{ より } \lim_{m \rightarrow \infty} (a_m - p) = 0$$

すなわち $\lim_{m \rightarrow \infty} a_m = p = \frac{1}{2003} < \frac{1}{2002}$

これは矛盾である.

したがって $\frac{1}{2002} > a_m$ となる m が存在する.

[10] ● [3C269] 行列の関係式で表される点列. 2点間の距離 [2002 数学Ⅲ C269]

行列 $P = \begin{pmatrix} \frac{2}{3} & -\frac{1}{2} \\ \frac{1}{2} & \frac{2}{3} \end{pmatrix}$ および列ベクトル $\begin{pmatrix} a_1 \\ b_1 \end{pmatrix} = P \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}$, $\begin{pmatrix} a_2 \\ b_2 \end{pmatrix} = P^2 \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}$, \dots ,

$\begin{pmatrix} a_m \\ b_m \end{pmatrix} = P^m \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}$, \dots を考える.

(1) 点 $(1, 1)$ と点 (a_1, b_1) の距離 d_1 を求めよ.

(2) 平面上の2点 (x, y) , (z, w) 間の距離を s とする. 2点

$$\left(\frac{2}{3}x - \frac{1}{2}y, \frac{1}{2}x + \frac{2}{3}y\right), \left(\frac{2}{3}z - \frac{1}{2}w, \frac{1}{2}z + \frac{2}{3}w\right)$$

間の距離 t を s を用いて表せ.

(3) 点 (a_{m-1}, b_{m-1}) と点 (a_m, b_m) の距離 d_m ($m = 2, 3, 4, \dots$) を求めよ.

解説

(1) $\begin{pmatrix} a_1 \\ b_1 \end{pmatrix} = \frac{1}{6} \begin{pmatrix} 4 & -3 \\ 3 & 4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \frac{1}{6} \\ \frac{7}{6} \end{pmatrix}$ から

$$d_1 = \sqrt{\left(1 - \frac{1}{6}\right)^2 + \left(1 - \frac{7}{6}\right)^2} = \frac{\sqrt{26}}{6}$$

(2) $s = \sqrt{(z-x)^2 + (w-y)^2}$ であるから

$$t^2 = \left(\frac{2}{3}z - \frac{1}{2}w - \frac{2}{3}x + \frac{1}{2}y\right)^2 + \left(\frac{1}{2}z + \frac{2}{3}w - \frac{1}{2}x - \frac{2}{3}y\right)^2$$

$$= \left\{\frac{2}{3}(z-x) - \frac{1}{2}(w-y)\right\}^2 + \left\{\frac{2}{3}(w-y) + \frac{1}{2}(z-x)\right\}^2$$

$$= \left(\frac{4}{9} + \frac{1}{4}\right)\{(z-x)^2 + (w-y)^2\} = \frac{25}{36}s^2$$

ゆえに $t = \frac{5}{6}s$

(3) (2) では, $\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$, $\begin{pmatrix} z \\ w \end{pmatrix}$ 間の距離と $P \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$, $P \begin{pmatrix} z \\ w \end{pmatrix}$ 間の距離との関係を求めていることになる.

ゆえに $d_{m+1} = \frac{5}{6}d_m$

$$d_1 = \frac{\sqrt{26}}{6} \text{ であるから } d_m = \frac{\sqrt{26}}{6} \left(\frac{5}{6}\right)^{m-1}$$

11 ○等式を満たす複素数. 方程式の解について偏角 [2002]

次の問いに答えよ. ただし, 偏角 θ は, $0^\circ \leq \theta < 360^\circ$ の範囲で考えるものとする.

- (1) $|z+i|=|z-i|$ を満たす複素数 z は, 実数に限ることを示せ.
- (2) 複素数平面上で z が実軸上を動くとき, 複素数 $z+i$ の偏角 $\arg(z+i)$ の動く範囲を求めよ.
- (3) z を未知数とする方程式 $(z+i)^9=(z-i)^9$ のすべての解 z について $z+i$ の偏角 $\arg(z+i)$ を求めよ.

解説

(1) $|z+i|=|z-i|$ を満たす点 z は, 2点 $-i, i$ を結ぶ線分の垂直二等分線上すなわち実軸上にあるから, z は実数である.

(2) z が実軸上を動くとき, $z+i$ は点 i を通り実軸に平行な直線上を動く. したがって $0^\circ < \arg(z+i) < 180^\circ$

(3) $(z+i)^9=(z-i)^9$ から $|z+i|^9=|z-i|^9$

ゆえに $|z+i|=|z-i|$

よって, (1) から z は実数である.

したがって, (2) から $\arg(z+i)=\theta$ とおくと $0^\circ < \theta < 180^\circ \dots\dots$ ①

また, z は実数であるから $z-i=\overline{z+i}$

よって, $\arg(z+i)^9=\arg(z-i)^9$ から $9\theta=-9\theta+360^\circ \times n$ (n は整数)

ゆえに $\theta=20^\circ \times n \dots\dots$ ②

①, ② から $\arg(z+i)=\theta=20^\circ, 40^\circ, 60^\circ, 80^\circ, 100^\circ, 120^\circ, 140^\circ, 160^\circ$